1 趣旨

京都府内には多様な自然生態系が存在しているが、それらのほとんどは歴史的に見ても人々の生活文化と深い関わり合いを持ちながら形成されてきたものである。

これら府内の自然生態系の現状を総合的に把握することは、今後の府内の自然環境保全を考える上で大変重要なものであると考えられる。そこで、府内で保全すべき重要な生態系が成立している地域、希少な野生動植物の自生地などについて現状をまとめた。また、今後の生態系保全のあり方を方向付けるため、現在の京都の自然環境を作り出してきた背景について時代を遡って分析し、地域文化や人々の生活と自然との関連を明らかにする試みを行った。

2 調査対象

◎地域生態系

自然性が特に高い植物群落や希少な群落、典型的な二次的群落など、生態学的価値、学術的希少価値、遺伝子資源価値など、府内における保護上重要な 39 の植物群落について、その特長、分布（府内での分布）、保存に対する対策をとりまとめた。

なお、個々の植物群落だけでなく、たとえば「水生植物群落」のように、ある立地に異なる群落が複合的に配列されており、生態学的、学術的に価値を持つ植生や、各群落の成立環境や群落の動態の面から相互に関連しあっており、学術的に重要な植生についても対象とした。

◎人間－環境系の歴史的側面

府内の自然生態系のほとんどは、人為的な影響との関わりの中で形成されてきた。その人間の自然への関わり方は、長い年月の間に大きく変化してきたが、ここ 50 年ほどの間にも変化してきた。そうした大きな人為的影響の変化に伴って自然生態系も大きく変化してきている。このことは、近年野生の動植物の中に、急速に分布や個体数を減らしてきている種が増えている一つの重要な背景となっている。

そこで、京都府レッドデータブックでは、希少な野生動植物の保全を考え、今後の自然との共生のあり方を考えるため、府内におけるかつての自然景観やその背後にあった人と自然との関わりなどを現在との比較も含めながら考察し、人間－環境系の歴史的側面として八つのテーマについて取りまとめた。

テーマ１：　真景図に見る江戸時代中期から後期における京都の植生景観
テーマ２：　江戸時代の砂防（土砂留め）制度と土砂災害―山城・丹波を中心に―
テーマ３：　明治以降における京阪奈丘陵地北部の里山景観の森林化過程
テーマ４：　京都盆地周辺における平安時代以降の植生の変化　―マツ林から常緑広葉樹林への植生の大変化

テーマ５：　京都市鞍馬における里山利用と伝統文化
テーマ６：　京都近郊の変化　―主に明治以降における運搬手段と暮らしの変化との関係において―
テーマ７：　土地利用の変化が京都市周辺のチョウの分布に与えた影響
テーマ８：　京都府における獣害とその対策２